
はっきりいましょう。

ヒビキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はつきりいましょう。

【コード】

N1250U

【作者名】

トビキ

【あらすじ】

あららぎさんとはちくじのなかよしな会話。

「……常々思っていることなのですが、その飽くなき探求心は一体どこからやって来るのですか桂木さん」

「僕を『現実なんてクソゲーだ!』と言う落とし神のように言うんじゃない。僕の名前は阿良々木だ。

それより僕が言って良いことか解らないが、八九寺、それは探求心か？」

「本当に、言えた話じゃありませんねえ」

深呼吸に合わせて八九寺は深く嘆息する。まるで阿良々木のどうしようもない性癖について、諦めるかのような音で。

地面に座り込む八九寺は、行儀が悪い、と叱るものかも知れない。けれどどうだろう。そのあどけなき少女が吊りスカートの紐がだらしく外れ、ブラウスのボタンが上下二つ外れ、それら全てに抵抗の痕跡が見られたのなら。

犯罪だ。犯罪の香りがするのではなく、もうすでに犯罪だ。

そしてその犯罪を犯した知り合いを見上げて、八九寺は言った。

「探求心ですよ。小学生の身体に興味津津なんですよね？」

「違う！」

それは断固として違う、と言わせて貰おうか。

僕は小学生の身体に興味なんかない。興味があるのは八九寺の身体だけだ」

「キリツと格好付けて言っても格好よくありませんから！」

大体、と言いなながら、スカートをはたき、立ち上がる。スカートをはたくよりもまず身なりを、具体的には犯罪の余韻を消す方が先だと、阿良々木は言わなかった。

「いい加減にしないと本当に通報されますよ？」

「大丈夫。だって僕は悪くない。」

悪いのは八九寺が可愛すぎるからだ」

「全部人のせいにしてやがりますかっ!？」

ツインテイルが驚きを表してぴよんと跳ね踊る。

あれ引つ張つたらまたブチ切れられるんだろうなあと反省の色の無いことを考えていた阿良々木の前で、八九寺は両手を突き上げ、叫んだ。

「なら自分で通報しますっ!阿良々木さんがいかに探求心に満ち溢れた好青年か警察に事情を説明しますっ!」

「な、何い!？」

は、八九寺、いや真宵ちゃん、そんなことしたら阿良々木君困っちゃうでしょ?ダメだよ、メッ」

「羽川さんの真似しないで下さい!普通に嫌ですっ似てません!」
「似てるって羽川にもお墨付きを貰ったのに!

なあ、気に入らないところがあったなら直すよ、だからやり直すっぜ。上手くやれると思うんだ、僕たち」

「触らないでください!」

怒れる八九寺の頭にそーっと伸ばした手がはたかれる。

そしてきつとにらみ上げると、少女は言った。

「私は、阿良々木さんのことが嫌いです」

「あなた、を名前に変えたただけなのに……!破壊力が段違いだぜ……」

がつくり膝を着いて頂垂れる阿良々木の頭上から、あ、と可愛らしい前置きのあと。

「失礼、噛みました」

てへ!と舌を出して笑う八九寺を見て、

「八九寺いいいいっ!そうか噛んじやったか!噛んじやったのか!仕方ないな仕方ないなあ八九寺だもんなあ!僕も噛んじやつおっかな!」

「きゃー!?!きゃー!」 感極まった阿良々木が熱烈な愛情表現を
施し始めた。

(後書き)

(振り出しにもよる)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1250u/>

はっきりいいます。

2011年7月5日16時43分発行